令和元年度第１回伊勢市まち・ひと・しごと創生会議　議事要録

◆日時　　令和元年 10 月 9 日（水）19：00～20：35
◆会場　　伊勢市役所東庁舎 4-3 会議室
◆出席委員
酒徳 雅明委員、中村 基記委員、米澤 尚之委員、委員、齋藤 平委員、加藤 徹也委員、北村 和也委員、松山 泰久委員、廣島　朗委員、山下 智史委員、安藤 大作委員
◆欠席委員
山本 誠委員、福村 伝史委員、前澤 謙行委員、秋山 則子委員、山川　一子委員
◆出席職員
情報戦略局【情報戦略局長、情報戦略局参事兼企画調整課長、同副参事、同課長補佐、同主査 2 名、情報戦略局参事兼情報政策課長、同室調査統計係長】
環境生活部【市民交流課副参事】
教育委員会【学校教育課長、教育研究所長】
健康福祉部【健康課長、こども課長、高齢者支援課長、障がい福祉課長】
産業観光部【商工労政課長、同課副参事、農林水産課長、観光振興課長】
都市整備部【都市整備部参事兼建築住宅課長、同課副参事、都市計画課長、交通政策課主幹】
◆内容と結果
１　諮問
２　第 2 期伊勢市まち・ひと・しごと創生総合戦略について（事務局説明①）
　⇒　KPI の設定も含め検討し、方向性について大筋で了承された。
３　第 1 期の検証について
　(1) 伊勢市の人口動向について（情報政策課説明）
　(2) 第 1 期伊勢市まち・ひと・しごと創生総合戦略の総括について（事務局説明②）
　⇒　検証の結果、第 2 期へ向けて、財源の見直しや人口のダウントレンドの捉え方、また、本市ならではの特色ある取組をより明確にすべきであったこと、表現の上で希望が感じられる情緒を含めたものにすると良かったなどの意見を得た。

◆会議録（要録）
以下の要録は、事務局により要旨を編集したものですので、微妙なニュアンス等が表現されておりませんので、ご了承ください。

【事務局説明①に対する質疑】
・このあと第１期の総括の話があると思うが、第１期では交付金は申請されたか。交付金の規模と使途と効果は総括の中にでてくるか。
⇒加速化交付金等について申請しているが、今回の資料はそういう作り込みにはなってい

ないため、そこまでは掲載していない。
・例えば一点、資料の参考 2 で、「誰もが活躍できる地域社会をつくる」という中に方向性として外国人がこれからどんどん増えるでしょうという話があるが、教育現場でいうと、一概には言えないが外国人の数が沢山になると、教室のマネジメントが難しい、しかし先生が足りていないというのはよく聞く話。そうした時に外部人材とか人を補充したりして対応していく、しかし、人を補充するにしても財源はどこから出るのか。そうした場合に、国の指針に沿って動くならば、国から一定の交付金が約束されているならば例えばそれを活用するとか、あるいは自らで自主財源を生むという方法の一例だが、千葉県佐倉市は学校のプールを業務委託することで３０年間で１７億円のコストをカットするという試算を行い、そのことによって生まれた財源で外国人に対応するために人を配置している。交付金を使うのか、こうして自主財源を作るのか、こうしたことを各論具体にしていった方が良いのではないか。

・今 40 歳の女性の人口が 92 万人といわれているが、0 歳の女の子が既に 46 万人、つまり出生率が変わらずとも人口は半分になる。減少は目に見えている中で、歯止めをするといってもどうなのかという部分がある。増やすというのもあるが、少なくとも生きていける、付加価値や生産性に着目して少なくとも生き抜いていけるまちづくりというのも一方であるのではないか。スモールシティとか、スマートシティとか、いろんな考え方があると思うが。国の方針が維持でそれに沿う、ということなら今の話は合わないが。

【情報政策課説明に対する質疑】
・仕事を生む、雇用を生むという話なので、資料として、生産年齢人口という観点も含むべきだと思う。
⇒本日配布の資料には含んでいないが、今後、人口ビジョンを改訂する中でいれさせていただきたいと思う。（※後ほど会長より、現行の人口ビジョンに資料として含まれている旨、委員各位へ説明がなされた）

【事務局説明②に対する質疑】
・1 ページの評価のある部分でポイントだけ。1 番の安定した雇用を創出すると、2 番の新しい人の流れを作るという点に関して、ちょっとウォッチされるとどうかなと思うのが、N 校っていう高校があり、生徒数が 1 万 2 千人になろうとしている。日本全国の高校生 330 万人のうち、12,000 人、300 人に一人がこの高校に通っているという恐ろしく大きいネットの高校である。ネットの高校もそうだが、ネットの大学、色んな国家戦略特区とかも見ていただくと、色んなことができるんじゃないかなというようなことがまず 1 点。
　それから 3 番で、衰退型の人口ピラミッドから脱却としよう思うと、どうしてもやっぱり若年人口、若い人の流入というのがマストだと思う。そういった中で、千葉の柏市とか、流入の多いところというのもまたウォッチしていただければと思うが、単純に言うと手厚

い子育て支援をしている。総務省の調べでも、なぜ子供を産まないのですか？という意図の質問に対して、子供の教育費がかかる、医療費がかかるが 1 位、2 位。当然費用に関することになっている。

柏市は色々と支援しているが、その財源をどうするのか、という問題が絶対出てくる。先ほど申し上げたが、例えばプールであるとか。プールをことさらに言いたいわけではないが、これまでの当たり前というのをもう一度見直すことで財源を生む。

それから東京では、受験生チャレンジ支援貸付事業というのをやっており、受験生の受験費用の貸付というのを無利子で行っているだけではなく、高校や大学入学者の返済が免除されるというようなチャレンジ支援貸付事業をしている。お金があるからできるのではないか、ということかもしれないが、無駄を見直すというか、これまでの当たり前を見直すことでお金をどこかで作ってくる。そういうようなことをしながら、子育て支援を厚くすることで、やはり若い人の流入を促進している。人口ピラミッドが衰退型から脱却するためには、若い人の流入が当然必要であって、それには子育て支援、そういう財源は何かしらで作るということ。それを様々な地方税で賄うとするならば、当然誘致の話になると思うが、それに関しても国家戦略特区とかをうまく活用すれば、色々やっているところがあると思う。

最後に 4 番の暮らしやすい生活圏、これも長野県松本市の事例というのをまたウォッチしていただければと思うが、駅前の道路の再開発、いわゆる 90°の碁盤の目状の交差点というのを計画しながら、中心市街地がどんどん活性化していったというような事例もある。コストがかかることなので一概には言えないが、コンパクトシティ化するというのは当然、ダウントレンドに沿ったことなのでいいかと思う。

冒頭に申し上げたが、ダウントレンドに沿う形でいくのか、ダウントレンドに抗う形でいくのかというのがすごく大きな問題だと思う。もしもキープとかダウントレンドに抗う形でいくとするならば、これは相当、これまでの延長線上からは一部離れてものを見ることも絶対大切ではないかと。また、様々なことをやり過ぎると限定的なマンパワーが分散してしまうので、ダウントレンドに抗うならそれも含めて精査する必要があるのではないかと。

最後に、先ほど教育現場にタブレットということが報告の中であったと思う。タブレットを配るだけじゃなくて、学校の個人情報管理をクラウド型にも同時に、タブレットを配るならばその情報管理をクラウド管理にした方がよいと思う。どうしても現場はペーパー管理で、そのことによって学校の教職員の方々の業務改善というのはなかなか進まないと思うので、それをクラウド管理にすることによって、タブレットをいれるならそこはペアで動かないとビジネスプロセスは改善しにくいんじゃないかなということ。タブレットのことはそのことが 1 点気になった。

・タブレットについては最終的には一人 1 台になる、ということか。タブレットについて情報があればお願いしたい。

⇒国は今年度の6月に最終目標は一人1台ということを言っているが、第3期の教育振興基本計画からいくと2022年までには3クラスに1クラス程度の配布ということを言っているので、まずはそれを目指している。最終的には一人1台になればいいということで進めているが、最終報告の結果でハイスペックなものでなくてよいとか、先ほどのクラウドの件も出ているので、それも含めて検討している状況。

・1期の戦略に基づいて結果を見せていただいたが、全国の都道府県、自治体1740が設定をしてずっと取り組んできているが、どこの自治体でも同じ内容だと思うことが多い。その中で、それぞれがどういう工夫をしているかということだと思うが、それぞれに色んな成功事例が出ていると思う。そういうのを踏まえて、2期をどうするのかという風に考えていかないといけないと思うが、今後、抜本的な改善を図っていくという取り組みにはなってないと思う。

もう1回色んな全国の事例であるとか、成功して例えば出生率が飛躍的に伸びているとかいうのを参考にして、じゃあ伊勢だったらどういう風にできるだろうかということをやっぱり考えていかないと、何か計画だけ作って終わってしまうような気がする。ただ、新しい人の流れという意味では、伊勢というのは他の地方都市と違う観光都市で伊勢神宮があるということが大きな違いなので、そのあたりはまた違ってくると思うが、他の項目に関しては、そういった事例というのを色々見てみるというのが大事。

・KPIでいうと、出生率のことだけ言うと、日本で一番出生率が高い徳之島はなぜ出生率が下がらないのか、それは伊勢と徳之島の背景は全然違う、それは当然分かるが、因数分解してエッセンスだけ取り出したら、こういう背景がそこにあるのか、出生率が下がらないのは、人口が維持できるのは、というようなこともリサーチしたうえで、それを伊勢に練りこませる。伊勢だとそれはこうだねというような、正解はないと思うが、正解を探す作業をしていくことは必要かなと思う。

・私が市の立場を弁明してもしょうがないが、これは国から切れ目のない支援をということで、この策定を急ぐようにということがあった。時間的に抜本的な見直しを図っている余裕がない、ということが現状だろうというところである。その中でも例えば出生率の問題とか子育て支援の問題とかについてはできるだけ、実効性のあるものを企画していただくということが重要。

子育て支援については、他市の例で大変恐縮だが、鳥羽市さんが非常に手厚い子育て支援のメニューを用意されて取り組まれたが、結局人口減少に歯止めがかからないという状況。恐らく、何かその町にとって不足しているこれがあれば、じゃあそこで子育てして暮らしてみようという何かがあると思うので、それをうまく見つけられるかどうかということがやっぱりポイントになるのではないかと。ちょっと抽象的な答えになって申し訳ないが。

・特に意見とか質問とかいうことではないが、議論の進め方として、伊勢市の人口増加について資料2に基づいて施策展開をどうするかという話しだと思うが、その中で4ページのところに出生数減少の要因、出生率低下の要因、これを見ると、いずれも女性の未婚率が上昇しているとか、晩婚化が進んでいるとか、適齢期の女性人口が減少しているとか、ここが課題だという要因分析をしていて、それに対する何らかの施策展開があるというのが一般的な話かなという風に思う。じゃあ具体的に何があるかといわれるとないのだが、そういう流れでご検討いただければという風に思う。

・私どもの立場としては、市と連携した就労支援を色々させてもらっている。障がい者であったり、生活保護者であったり若年者であったり、引き続き連携して取り組んでいきたい。やはり若年の方の地元就労、就職の促進というポイントだと思うのでやっていきたいと思う。そういう意味で人口ビジョンを見させていただくと、鳥羽とか志摩とか南伊勢の人は伊勢に来て、伊勢の若者は他所に行ってしまうという構図だと思う。伊勢だけでなく圏域全体で若者を定住できるように、伊勢市としてリーダーシップをとっていただきたいと思う。一緒にやっていきたいと思うのでよろしくお願いしたい。

・今日の説明の中で、特に人口の動向について、先ほどの7ページですけども、鳥羽市さんの件で言われましたが、先ほど言われた形の子育て支援が必要だと。また今回の会議でも出たが、やはり働く場所が大事かなと思っている。農業関係でも新しい方がおられるが、実際そのような方が生活できるかというと、なかなか難しい中で、やはりこれ以外にソフト面、特に先ほどいわれた伊勢という観光地の中で、それに結びついた産物を作っていかないといけないと思っている。なかなか一つのことだけでは無理かなと思っている。先ほど日本全国の例と言われたが、こちらを見ながら津・松阪には結構転出する中で志摩・鳥羽とくるが、玉城、明和でなぜかというような、多分住宅の関係かなと思うが、そのあたりの理由もわかったら、また教えていただきたいかなと思う。

・若い世代の特に学生の方たち、若年層の方たちがなぜ三重県を離れて近隣の他の県、都市の方に行って就職をするのを選ぶかという問題点を考えてもらい、やはりその若い子達が就職をし、結婚をし、子育てをしたいと思うようなまちづくりをしていかなくては、雇用を作ったところで人の流れが止まらないかなと思う。

　観光地なので、伊勢単体で考えるのではなく、県を巻き込んで、名古屋から伊勢まで特急で1時間20分ぐらいかと思うが､いかに人の流れを愛知県からこちらまで呼び込むか、この道筋を外宮内宮だけではなくて、三重県全体でやっぱり考えるべきじゃないかなと思う。

・基本目標それぞれに隠れている負の要因というのがいっぱいあると思う。その負の要因

を棚上げしておいて一つ一つを議論しても、前に進まないのじゃないかなというのが私の本心。数値とかをこういう風にして報告をいただいているが、この裏に負の要因というのが、いっぱい隠れていると思う。具体的に今言うと話が長くなるので避けるが、負の要因をどこまで分析して解決の方向に、1 個の基本目標の中に取り入れていくかというのが見えないのでなかなか難しいんではないかなというのが私の本音。

・今日初めてこの会議に参加させていただいて、私初めてこの伊勢の地に来て、本校の生徒の様子を見ていると、本当に伊勢が、地元が好きな生徒が多くて、先日体育祭があって、みんなが伊勢音頭を踊る姿を見て、62 回の伝統のある体育祭ということで私もちょっと感動したところ。

今年 3 年生全員と面談をしたが、子供たちが本当に地元が好きでという中で、就職の動向を見ていると、今年度やはり就職希望者数が減っており進学する生徒が多い、これは本校の特徴なのかもしれないが、地元で就職する生徒が、求人の方は多くいただいているがなかなか地元に就職してくれないというのが高校側のジレンマでもある。進学も地元で、親元で大学に行きたいという生徒も多くいるが、なかなか力不足もあって不合格になったりする、そうすると次にどこに行くのかというと、どうしても愛知県の方に行ってしまう。すると、その子達が 4 年後に伊勢まで戻ってきてくれるのかというのが高校現場では痛いところである。

そのあたりが今後、育てていかなければならないなという学校サイドの課題であり、本校としては今グローカル型という国の事業を 3 年間やっており、また伊勢市さんと色んな企業さんと地域と根ざして、地元のリーダーを育成するという視点で活動しているところ。また色々勉強させていただきたいと思う。

・教育の分野からということで参加させていただいているが、私、事業を営んでおり、自治会の活動にも参加させていただいたりとか、商店街のこともさせていただいたり、ここに書いてあること全て分かる。ここにある問題点も全て肌で感じている。

ただ一つ残念なのは、この資料、例えばここに書いてある伊勢市という言葉を消してこの資料を見たときに、はたしてどこのまちの会議資料なのか、それが誰も分からないと思う。伊勢市というのはそんなに平均的な町で、特徴のない町かなというと、私はそうではないと思うし、もっと特徴を出していくべきだと思う。

私も子を持つ親だが、昨今、ちょっと違ったら後でご指摘いただきたいが、今の子供たち、理系脳である。数学の宿題ばかりでて、ワークばかりやって、先生が丸つけるの楽だから、算数ばかりやって、高校受験でも、国際やとか総合とかという名の付く学科でも、数学が飛び抜けてできないと優等生にはなれないという社会の中で、きっと憧れの職業で、地元でいったら憧れの職業である公務員という職業の方は、きっとその辺の分析力はすばらしいものやという風に思う。

ただ、この資料の中に本当に右脳の要素がまったくないなというのが私の率直な感想。

左脳だけで作った資料じゃないないかなという風に思う。やればやるほど、分析すればするほどこういう風になるのはすごく分かるが、少しばかりのファンタジーが必要なんじゃないかなと思う。ここに工夫だとかアイデアだとかといったものが見えてくる、その向こうに、これが伊勢市の総合戦略なんだな、というのが透けて見えてくるような資料にならないと、こうやって伊勢の、ということで集まってやっている意味がないんじゃないかなという風に思う。そこに期待したいなというのが私の気持ち。